

狂言師

茂山あきらさんに聞く

(一九六八年中学校卒業・高等学校入学)

山田和人

きぎし

(大学文学部教授)

狂言の現在

山田 お生まれが一九五二年六月十二日と伺っていますか、私も同年同月生まれということもあり、ずっと親近感を持っていました(笑)。私は近世の芸能、人形浄瑠璃、歌舞伎をはじめとした古典芸能の保存、伝承についても研究していて、インターネットの「お豆腐狂言・茂山家ホームページ」など、茂山家のさまざまな活動をよく拝見しています。そこで思うのは、狂言が今、とても元気があるのではないかということです。

茂山 おかげさまで、良い意味も悪い意味も含めて元気があります(笑)。元気である理由の一つに、古典芸能役者のタレント化があります。歌舞伎は昔から女性に人気でしたが、室町時代に観阿弥・世阿弥親子によって大成された能楽は、江戸時代に入ると武家の式楽になり、庶民との関わりはなくなりました。明治以降も一部の粹人達の間だけで鑑賞されてきました。戦後、経済的な余裕と生活の多様化の中で人々が目を向けるようになりました。一方、狂言師は、父を含めた先人たちが、戦後の食うや食わずの状態の中で、それこそご法度を犯してまでいるんなことに挑戦してきました。この二つの相乗効果によ

って今の狂言があると思っっています。今、野村萬斎君をはじめとした若手狂言師が、マスコミや映画、テレビドラマなどで注目を集めています。和泉元彌君は別の意味で有名になってます（笑）。茂山家でも現在二十三歳の逸平が、NHKの朝の連続テレビ小説『オードリー』に以前出演していました。父親た



狂言「竹生島参り」

ちも私も若い頃、テレビ出演していましたが、あくまでもそれは狂言役者としてであって、その域を超えることはありませんでした。当時の「上つ方の役者」、「下つ方の役者」などという区別も今ではありません。流行というのはいつか廃れるものです。しかし、失礼になるかもしれないですが、よりたく

ている人を含めて、よりたくさんの人に、古典芸能を深く知っていただくよい機会でもあります。「私は、上等な人間です」とか「分かる人だけ分かればいい」という時代はすでに終わっており、マス・メディアなどを利用しながら、不易流行のように現代での狂言の売り方を模索していかなきやだめですね。

特別な存在ではないという視点

山田 マス・メディアに登場することによって、狂言は現代のほかのジャンルの芸能と横一列に並ぶことになり、その意味において、狂言がフラ



茂山あきらさん

ツト化、平準化していると思うのですが、いかがでしょう。

茂山 私はオペラの演出をすることがあるのですが、音楽家の方などに、能、狂言役者は特別な人ではなく、飯も食えばうんこもする普通の人だということを知っていたみたいです（笑）。芸能は芸術ではなく、高尚性を除いていく意味でのフラット化は必要です。それを踏まえた上で、お客さんにアピールしなきゃダメです。

山田 茂山さんは若い頃から、古典狂言はもちろん、SF狂言、バイリンガル狂言やオペラ、新劇、フアッションショーの演出、ラジオのDJなど幅広い活動をなさっていますね。

茂山 父親の影響が大きいですね。父である千之丞は、役者

と演出の両方を手掛けていました。「門前の小僧習わぬ経を読む」のような形で、幼い頃よりその父の姿を真近に見ていました。だから、一から積み上げていくというより、自然にしかも手っ取り早く役者と演出の両方のハウ・ツーを学べましたね。

山田 高尚性を除いていく意味でのフラット化が必要とおっしゃいましたが、確かに江戸時代に描かれた歌舞伎役者の錦絵には、舞台姿もさることながら、遊女と一緒にいる姿やたばこを吹かしている姿など、日常のリラククスした役者絵の方が数多く残っています。

茂山 役者にはたいいてい、舞台というONの部分と、日常生活におけるOFFという二つの顔があるわけですが、故人の桂春団治さんや藤山寛美さん、横山やすしさんなどは、役者ばかりといっても過言でなく、すべてをひっくるめた生き方自体がおもしろかった。今そんな生き方をしていけば、マス・メディアから阻害されてしまいます。最近では、人間国宝で歌舞伎俳優の中村鴈治郎の祇園の舞妓さんとのスキャンダルが問題になりましたけれど、私は、そんな鴈治郎さんの生き方が大好きです（笑）。今の多くの役者は、サラリーマン役者みたいなものです。枠の中にいる人しか認められなくなっています。役者とは本来アウトローで、江戸時代には「士農工商」の身分制度の中に含まれておらず、その不安定な位置の中で培われた「何くそつ」という強さが芸の中に取り込まれました。「何くそつ」ではなく、現代という時代の中に入りながら底辺から見上げていくことが何より大切なんです。現代という時代の中に混ざっている方が芸能の本来持っている強さが鍛えられ、後世

まで長く残っていきますよ。

山田 江戸時代には、ひいき連がとてモパワーがありました
が、今は不況ということもあってあまり元気がありません。

茂山 かつてのひいき連は、スターたちを取り巻いてる今の
グループのような存在ではなく、芸というものを深く理解し
ていました。そして、「お前、あそこへたくそや。もう少し上
手にせえ」などの批判を含めて肩入れしていました。お金を払
っているのだから、文句を言った方がいい(笑)。こちらとし
てもその方がありがたい。今のひいき連にはその批判がありま
せん。その原因の一つには、戦後の団塊の世代を育てた親たち
がしっかりとしたものの方を見方を子供に教える基礎教育を怠つて
きたことにあると考えています。お父ちゃんは仕事に忙しくて、
お母ちゃんは物を買うのに忙しかったんですね(笑)。その代
わりに基礎教育をすべて学校に押しつけてきました。それが現
在でも続いています。覚えるということは人の頭脳を拝借して
いるにすぎません。覚えたことを噛み砕いて、自分の言葉でも
う一度組み立てていく能力が必要ですが、その能力が低下して
います。学校五日制、ゆとり教育も大いに結構ですが、そのゆ
とりをどう使っていくのかを考えなきゃいけません。加えて、
パターン化した教育も問題です。今、大阪府立東住吉高等学校
で狂言を教えているのですが、体育祭の二週間前から行われる
クラス対抗ダンスの練習では、生徒の顔がとてモ生き生きして
います。それに比べて、普段の授業では死んだような顔ばかり。
本来楽しいはずの授業が、義務的に教育する教師と義務的に教
育される生徒というシステムの中で、歪んだ形になっているよ

うに思います。

文化の質の違いについて

山田 現代人は、経済的には豊かになっていると言えますが、
果たして文化的に豊かになっているかどうかは疑問ですね。

茂山 文化は基本的には余分なもので、人間の体内から出てく
る排泄物のようなものです。言ってみればカスみたいなもので
す(笑)。しかし、余分だからこそ重要だとも言えます。人と
いう土壌は、そこに種を蒔けば、さまざまなものを涵養する栄
養分を持っています。生活がゆつたりしている時代には、びた
つとそのサイクルが合っていたわけです。それが今、生活のス



山田和人さん



狂言「花子」

ピードが増していく中で、使い捨てられるだけで何も残らなくなっている。ものすごく意図的に作られた文化が広がっています。経済が発展して、余暇ができて、いろいろな場所に出かけるようになりましたが、それは台本のある文化です。映画館で観客がスクリーンを見ながら左右の観客を窺い、「ここで、泣いていいものだろうか」とためらう。家族でキャンプする時でも、四輪駆動車を買って、コンロセット、ウエアも揃えます。ウエアにはこだわりがあつて透湿性・防風性に優れたゴアテックスしかダメ（笑）。皆さん同じ格好をしているわけです。まずそれがあきで、小鳥の鳴き声を聴く楽しみや擦りむいて血が出て、自分にも血が流れていることをあらためて気づくといった風に、発見が後回しになっています。また、海外旅行をしている日本人観光客が観光名所を訪れ「すごい！ 写真通りだ」と言つて安心しちゃう。風船が膨らんで容積だけが増えているような、かなり空虚な文化が流布しています。

しかし、各地方にはまだそれぞれ独自の文化があるのも事実です。例えば江戸落語と上方落語を比べてみますと、上方落語は町人の文化で笑わしてなんぼというところがあつて「これでもか、これでもか」と（笑）。つまり「実」をとっているのですが、それに比べて江戸落語は、武士の文化の影響で「武士は食わねど高楊枝」と言うように「見栄」をとつていて、同じ話をしてもまったく違います。また同じ上方落語でも京都はワンクッション置いた笑いです。笑いが育つ土壌は、どちらかといえば関西にあります。狂言は喜劇というよりは笑劇で、庶民のもので、テーゼとアンチテーゼがあつて、その揺らぎの中で、

笑いが起こります。武士が持っていた単一な価値観では、人間の思考の幅が極端に狭まってしまい、笑えない。武士というのは、笑わなかったのではなく、笑えなかったと思います。

今、東京から発信されているテレビでのバラエティ番組はシステム化されていて、強制的な「さあ、笑え」という笑いしかないような気がします。関西には、「これ、おかしいでしょ」とゆだねる幅のある笑いがあります。今、吉本興業さんが笑いを席卷しているのは、関西の笑いだからというのが大きな要因だと思います。

山田 確かに、マスコミなどで作られた一つのフィルターを通して見る傾向が強くなります。借り物のフィルターを重ねていくうちに、真つ黒になり、結局自分自身の視点を見失いかねません。

茂山 文化、文明には、継承、破壊があり、そして創造があります。継承だけでは創造はありえない。それをいったん破壊しなきゃいけない。私たちの世代は、何でも破壊しましたけれど（笑）。今の政治家はうまくなくて、破壊する対象を見せないんですね。だから今の若い世代はしんどいと思います。

また、継承するということが難しくなっています。私はよく「狂言をやめたくなつたことはありませんか」と聞かれるのですが、「朝起きて、歯を磨くことに疑いを持つ人がいますか」と言っています（笑）。私にとって狂言とはそういうものです。生まれた時から狂言の声が自然と聞こえていました。これが本来の継承だと思いますが、今の時代では難しい。

この行き詰まった状況を打開するためには、いったんこの加

速度が増した時間を止めて、かつての時間の流れに近づけることが大事です。極端に言えば、秒以上の細かい単位で管理されているわけです。あまりに前へ前へと進み過ぎです。私たちの世代は川をせき止めるダムのように、一気に止めようとしたから無理がありました。古典芸能をはじめ、バーチャルな世界を通して時間的なズレを起こすことができると思います。

山田 現場から学ぶのも大切です。私は授業で、インターネットを使つた古典芸能を応援するホームページを作つたりしていますが、その時でも、まず、学生たちに実物を見てもらい、劇場の雰囲気を感じてもらおう。実物を見ることで興味が湧き、もつと知りたいという欲求が出てきます。各地域の空間的な広がりをまず見せてから、時間的に遡つていっています。

茂山 さきほどの各地域の文化の特色のことで言いますと、日本と西洋では、芸能という捉え方が随分違います。日本では血縁での継承がほとんどですが、西洋では、中身を分解して論理的に積み上げていく方法論が主流です。演劇にしても、呼吸の仕方などを分析するわけです。狂言では、いわゆる「まねぶ」が基本で、論理的な方法論はありません。まねぶことは学ぶことにつながりますが、方法論を説明してくれと尋ねられても、役者はウーンと唸るだけです。最後には苦し紛れに「昔からそう決まっているんや」と言ってしまう（笑）。言葉でなかなか説明できないんですね。アメリカ、ヨーロッパには、多くの研究者がいて、カレッジに演劇科があるのは当たり前。演劇が一つのジャンルとして認められています。日本には演劇博士がほとんどいなくて、学問の研究対象としても歴史が浅い。日



に短縮できるようになるのではないかと考えています。

これからの狂言のあり方

山田 ところで、能・狂言は、二〇〇一年五月十八日に、ユネスコの「世界無形文化遺産」に指定されましたね。

本の学者、先生方にはもつと古典芸能の実態に興味をもってもらいたいですね。能を研究している方は、世阿弥の能など歴史的な興味はありますが、現代の能そのものにはあまり興味がな
いみたいですね。
理論的な方法論が狂言の世界でも確立されれば、理解しやすくなり、身内だけの非常に狭い世界になりがちな狂言の世界を外部的人に開放することにつながります。そうなると、六歳から稽古を始めて、何とか一人前にできるようになるのが二十歳くらいと、今までは十四年ほど掛かっていた歳月が十年くらい

ています。アンコールワットなど有形遺産は残すべきでしょうが、無形遺産は、生まれてくるものがあれば、消えていくものもあり、自然淘汰があつていいと思います。おもしろくなければ、当然消えていった方がいい。よく継承が問題になりますが、もし次の世代が狂言がおもしろくないと感じればやめた方がいいですよ。継いでもらつてももらわなくてもどちらでもいいというのが本音です。今の時代は、変わることを嫌つていて、悪くならなければ、今日のままでいいと考えています。これは人間の生き方としてはおかしいですよ。私は、変わらない文化よ

茂山 能楽界全体としては、「たいへんありがとうございます」と好意的に受け取つていますが、私個人としては、「冗談じゃない。遺産#なんて失礼なこと言いなさんな。能・狂言は今も生きてんのや。生きている物を遺産にするな」と今でも言いたいくらいです(笑)。この遺産という看板だけで、狂言があつたいものだと思ふ人が多くなるのではと心配し

りも変わっていく文化の方を選びたいですね。

私は若い頃、アメリカへ渡っているんな芝居を上演していたのですが、いつも日本を引きずって、己の中だけを見ていました。今の若者は白けているから、もう少し自分を含めて客観的な視点を持つことができるでしょう。私の息子は今海外で生活しているのですが、息子のような古典芸能の素養を持った若い人が、日本の土から生まれたお百姓さんの芸能を騎馬民族であるヨーロッパの地で育て、グローバルな新しい形を生み出してくれるのではないかと期待しています。

また、今の若者は手足が長く、息子などは正座するとひざから下がきちんと納まらず、足の裏が外にはみ出てしまいます。私たちがやってきた狂言を同じように注文しても無理です。着物を着せても腰の位置が高いから不格好ですし（笑）。能の舞台は三間四方ほどと決まっていますが、今の若い人の身長は百八センチを超え、こともぎらにあつて、舞台が狭く見えてしょうがない。継承していくことはもちろん、今の人の大きさに合わせて、舞台の大きさを変えていくなどの工夫も必要です。古典芸能の形は昔から決まっているからではなく、疑いを持つて接していくことが大切です。同時に、伝統的な舞台も大切にしないではいけません。以前、東京の千駄ヶ谷にある国立能楽堂が設立されるときに、昔どおりにつくりましょうという話があつて、私は、それならできるだけ伝統的な形に忠実にした方がいいと考え、東本願寺にあるような伝統的な舞台をつくりましょうという意見しました。結局は中途半端な形になつてしまいました。新旧の能舞台が対比できて、その違いが分かる

ようにすることが大切です。

先ほども述べましたが、朽ちていくものは、朽ちていった方がいい。その方が自然です。一度はやったものを持続させるのではなく、選択していくと同時に新しいものに取り組んでいく。百年後に顧みたときに、昭和、平成に生まれた狂言のうち生き残るのはごく僅かだと思います。絶えず次の古典を生み出すとする姿勢が大事です。世阿弥さんが創った能楽だけが本物だと悦に入っていれば、おかしくなります。

山田 昭和三十年代に文楽で復元された物語がやはり、そのうちで今でも残っているのはごく僅かですが、『曾根崎心中』は今でも大変人気があります。三味線のリズムをアレンジして現代のテンポに合わせるなどの工夫をしています。

茂山 ある意味、新作ですよね。現代の切り口で作ったからこそ今でも人氣が落ちない。素材は古典ですが、まったくの現代劇です。きっちり保存していくことも必要ですが、常套に甘んじてはいけません。壊して創っていく。そして、どんな時でも底から見上げていくことが必要です。現代に生きている私が、現代に生きているお客さんに対して演じることが大切なのです。

山田 お話を伺いまして、お鍋の中でぐつぐつ煮ている間にまわりのだしに上手に染まる豆腐のように、伝統を守りつつも、時代というだしの中にうまく染まる狂言をめざす茂山家のお豆腐狂言主義がよく分かりました。本日はありがとうございました。

(二〇〇二年六月十三日京都・観世会館で収録)